ビッグスリーの孫と国際関係史

Harald Kleinschmidt
社会科学系教授

国際関係史とは何か，どうして勉強する必要があるのか？

これを説明するために，ちょっとした逸話を語ることにしたい。

昨年のことだが，70歳，64歳，60歳になる３人の年配の男達がヨーロッパの将来について話し合うため１年後にオランダの景勝地で再会することを約束した。その際には無条件，何も足かせをつけずに自由に話し合うことにしたのだが，ただ何らかの結論をだすことだけは最低限守ることになった。

アメリカから参加した最年長者カーティス・ルーズベルトの定年前の仕事は国連職員であった。次ぎの男はもはや存在しない国，ソビエト連邦からやってきた。ソ連軍の元大佐，生粋の共産党員。彼の名はイェフゲニィ・ドジュガシュヴィリという。一番若いのがイギリス政府の元職員で現在は新聞や雑誌に寄稿したりしているウィストン・S・チャーチルである。この３人の年配の男達には共通項がひとつだけあった。ビッグスリーの孫だということである。

ビッグスリーとは，アメリカ合衆国元大統領（在任期間：1933年－1945年）フランクリン・デラノ・ルーズベルト，そして共産党書記長（1922－1953），ソ連議会議長（1941－1953）であったジョセフ・ドジュガシュヴィリ，通称スターリンであり，そして元イギリス首相（1940－1945，1951－1955）ウィンストン・チャーチルである。

ビッグスリーは1945年２月４日から11日にかけてロシアのクリム半島にあるヤルタで第２次大戦終了後のヨーロッパの運命を左右する会談を行った。その際，ヨーロッパの分割案が持ちだされ，その後の東西紛争の種を蒔くことになった。

今回，これら元国家元首の３人の孫たちが集まって，ヤルタ会談を芝居のようにして再現しようというのである。再現

劇などというノスタルジーに満ちた行為がどのようなものか読者には憶測がつくかもしれない。3人の孫は庭園のガーデンチェアーに座ってポーズをとり，そして閉じられたカーテンの向こうでは，小チャーチルが小スターリンに紙切れを押しやる。棒線の引かれた両側に数字が書きこまれたこの紙切れは，ヨーロッパ大陸をどのように分けるかを提案するものだ。そして最後に第2次世界大戦終結に向けた戦略を協議し合う。

ここではビッグスリーの3人の孫がなぜこのような再現劇をするかに興味があるのではない。再現することにより過去を現実に呼び戻すことが果たして可能であるかに焦点を当てている。歴史上の人物は歴史書，文学，ドラマなどで繰り返し描かれ，文化圏が違おうともこれに変わりはないが，歴史の著述者と立役者とが同一であることはめったにない。歴史家は距離を置くことを知りその後の歴史の流れを知る者として過去の出来事を報告する。詩人や役者は，文章やせりふや歌や動作により過去の人物を具象化する，役を生み出し役を演じる人々である。しかも演じられる役と真実が同一でないことは読者も観客も承知の上であるのだが，3人の孫たちは他人には持ち得ない，家族の中で継承されたと信じる知識により偉大な祖父を体現できると思いこんでいる節がある。彼らは役者ではないのに役を演じようというのだが，これは不可能である。

3人の試みがどうであれ，死者を生き返らせることはできない。死者は寓話の中で生きているにすぎないからだ。3人は心ならずも死者が生き返ることはないことを思い起させてくれた。過去が追憶の中でしか存在しないということは，最重要な前提である。記憶は個人により取捨選択されるため，完全な形では存在しないからだ。従って記憶が祖父から孫へと継承されることはないのである。過去の出来事を完璧に再構築できるものなど家族であろうがなかろうが誰もいないのである。

過去の記憶を現在に呼び戻すには史料存在がなくてはならない。

詩人や演劇人はどの時代においてもこれを知っていて，そして忘却のかなたにあり確とした証拠がある訳ではない過去をファンタジーで肉付けする自由を欲しいままにしてきた。

しかし歴史家には己のファンタジーを抑える義務があるし，また，史料が伝える過去が真の歴史であるとの考えにも長い間支配されてきた。

しかしそうした信頼性は確かなものではない。どのように優れた歴史家であろうとも記憶のもろさを阻止することはできないということを我々は知っている。

個々の記憶は多岐にわたり，また記憶は時と共に変化するため，世代が代わると歴史も新しく描きなおされることになる。このため歴史家は歴史的事実と，物語とを厳密に分離しなければならない。

孫のドジュガシュヴィリが小さいときに祖父の膝にのっていたことは周知の事実ではあるが，しかしだからといって誰にも増してヤルタ会談についての知識がある訳ではない。

家族の記憶と歴史的な出来事に対する集団の記憶との間には，一軒の家と村ほどの差異がある。村落が個々の家の集団であると同時に，集団の記憶が個人の思い出の集まりである場合があるのだが，だからといって一軒の家を拡大することで，その村の全体像を把握することができる訳ではない。

ビッグスリーの３人の孫たちは，家族という私的世界と公的世界を同一視しただけでなく，時の流れを見過ごしている。ヤルタのビッグスリーと同体になったと錯覚するのは勝手であるが，1945年２月ヤルタにいたビッグスリーと違い彼らには歴史の流れを決める力はない。歴史はすでに作られたものである。決定はそれがなされた瞬間に過去のものとなり，その大半はやり直しがきかないもので，ヤルタの決定もそのひとつであった。

３人は，ヤルタ会談以降どうなったかという知識を後世の人間として持っており，歴史は変えられない事を知りつつ再現劇を演じることになる。

時の変化を認めようとしない者，歴史の歯車を逆転させることができると考える者は，歴史の扉を閉ざしてしまう。歴史と現在とは違うものだということを認識してはじめて歴史の扉は開かれる。歴史に目を向ける者すべて，現在の視点から歴史を見ているのである。従って歴史上の決定を評価するに当たっては，歴史家たるもの，つねに現在への繋がりを配慮しなくてはならない。そして歴史上の決定を変えることができるなどといった思いを歴史家が惹き起こすようなことがあってはならないのである。

我々はなぜ歴史に目を向けるのであろうか？　歴史は我々に僅かな顔をしか見せてくれない。その幾つかを理解することは可能だが，ほとんどは推測するのみであり，変えることは可能でない。しかし我々にはいまの状況，ここに至った経

緯を知ることはできる。これは家族についても，村についても，世界についても同様である。

人間の行動により世界がどのようになったかを述べるのが国際関係史である。立役者が一人であろうと集団であろうとも，そのテーマとなるのは戦争と平和であり，商業や交通であり，人々の英知と無知である。一言で言えば，権力のネメシス（因果応報）である。これを理解し著述するには，過去の手がかりとなる史料を辛抱強く慎重に研究しなくではならない。明確な結果が得られないことが大半だとしても，これが歴史家のしなくてはならない仕事となる。

例えば，チャーチルがスターリンにメモを渡したときに彼は何を考えていたのであろうか？

黙ったままメモを渡したことで，彼は図らずも欧州分割に同意し，そして終戦後の東部，東中部，南東部ヨーロッパにおけるソ連の覇権を容認したのであろうか？

もしそうであるとすれば，チャーチルが後に悲嘆を込めて表現した東西間の「鉄のカーテン」は，自らが望んだものであり，言葉巧みにそれを秘したのであろうか？

その真相についての論争は今後も続くことであろう。大チャーチルがその秘密を明かすことはなかったし，小チャーチルとてそれを知ることは不可能だったからである。

しかし，そのメモの結果，その後40年以上の年月にわたり何百万人という人々がその意思とは無関係にそこから派生した結果を受け入れなくてはならなかった。

３人の孫たちがどんな再現劇を演じようとも，それは，真実とはかけ離れた戯れにすぎないのである。

参考図書

クラインシュミット　ハラルド

Geschichte der internationalen Beziehungen (Stuttgart: Reclam, 1998), *The Nemesis of Power. A History of International Relations Theories* (London: Reaktion Books, 2000)

Understanding the Middle Ages (Woodbridge: Boydell & Brewer, 2000)

（ハラルド クラインシュミット
国際関係史）